

＜日本イギリス哲学会 第66回関西西部会例会 報告要旨＞

報告1： ブリティッシュ・イスラエルズムとアメリカ合衆国でのその受容

井上 弘貴

2017年8月にヴァージニア州シャーロットヴィルでおこなわれた「ユナイト・ザ・ライト」の集会がひとつの代表例であるが、アメリカ合衆国では近年、陰謀論的思考とも結びついた白人至上主義の隆盛が指摘されている。2021年1月6日の連邦議会議事堂襲撃事件もまた、その別の顕著な例として挙げることができる。この襲撃事件の際には、トランプ支持者たちに交じって、白人至上主義を隠さないいくつかの極右団体のメンバーが、議事堂周囲に集い、あるいは議事堂の内部に突入した。

白人至上主義の隆盛は、反ユダヤ主義の高まりと連動している。実際にシャーロットヴィルの集会では、「ユダヤ人たちはわれわれに置き換われはしない」というスローガンが参加者によって叫ばれた。アメリカ合衆国の極右思想が受け継いできた反ユダヤ主義は、クリスチャン・アイデンティティと呼ばれる異端的なキリスト教解釈のなかで醸成されてきたものと言えるが、この解釈の源流を成したのが、イギリスで形成されたブリティッシュ・イスラエルズムと呼ばれる思想である。この思想は、古代イスラエルの12部族のうちで失われた10部族が、イギリス（と西ヨーロッパ諸民族、ひいてはアメリカ合衆国）のルーツになったという、歴史的には根拠のない主張を展開した。その真偽はともかくもこの思想は、ヨーロッパ人こそが選ばれた民であり、ユダヤ人は偽りの民であるという主張を後世の思想や運動にもたらした。

本報告では、正統な考えとしては否定されているものの、信奉者を確保してきたブリティッシュ・イスラエルズムの19世紀後半の代表的論者であるエドワード・ハイン(Edward Hine, 1825-1891)らの主張を内在的に検討しつつ、その主張のアメリカ合衆国での受容を跡づけてみたい。

(神戸大学)

報告 2 : アンスコム の伝記と 道徳哲学

児玉 聡

近年、4人のオックスフォードの女性哲学者(G.E.M. Anscombe, Iris Murdoch, Philippa Foot, Mary Midgley)に対する関心が高まっており、彼らの思想と伝記的内容を含む著作も相次いで出版されている。とくに重要なのは Benjamin Lipscombe の *The Women Are Up to Something* (2021)、および Clare Cumhaill と Rachael Wiseman の *Metaphysical Animals* (2022)である。これらの著作は、20世紀中盤に興隆したオックスフォード哲学の思想史的理解を刷新する可能性を秘めている。とりわけ、自伝がなく、またこれまで伝記的な情報も少なかったアンスコムについて、彼女の家族や知り合いの研究者へのインタビュー等を通じた伝記的情報の解明が進んでいる。

伝記的情報は、それ自体として面白いものであるが、テキスト解釈にも新しい視点をもたらさう(cf. Ray Monk, 'Philosophical Biography: The Very Idea' 2001)。その意味では、思想史的関心が全くない哲学研究者も、新しく翻訳が出た『インテンション』や「現代道徳哲学」といったテキストを精読するだけでなく、こうした伝記的著作を読むことも重要だと考えられる。

このような背景を踏まえて、本報告では、「トルーマン氏の学位」(原著 1956年)、『インテンション』(原著 1957年)、「現代道徳哲学」(原著 1958年)、といった著作を理解する上で重要と思われるアンスコム の伝記的情報を整理して記述する。とりわけ重要なのはアンスコムのカトリシズムとウィトゲンシュタインの影響であろうが、テキストに明示されないこれらの事柄の説明を通じて、どの程度、こうした伝記的情報が哲学者の思想理解に役立つかを考えたい。

(京都大学)